

# 第38回 土光杯弁論大会

## 最優秀賞に松下天風さん

## 岡山賞に松田彩さん



土光杯  
松下天風さん



フジテレビ杯  
湯村将貴さん



特別賞岡山賞  
松田彩さん



産経新聞社杯  
三浦太地さん



ニッポン放送杯  
小西沙紀さん

若き論客が弁論を競い合う「第38回土光杯全日本青年弁論大会」(主催・フジサンケイグループ)が一月八日、オンライン形式で開かれた。「国難を乗り越えるために」をテーマに十人の弁士が参加し、熱弁を振るった。

最優秀賞の土光杯は、コロナ禍で若者が失った学びや出会いの機会を補填する必要性を訴えた東京大学の松下天風さん(二二二)が四年ぶり二度目の受賞。「未来を担

う人材が多く、機会や経験を失い苦しんでいる」とした上で、「若者の可能性を広げられるサポートを行うことこそが日本を国難から救う第一歩だ」と訴えた。

昭和を代表する財界人で、「メザシの土光さん」として知られる辣腕経営者、土光敏夫氏の出身地、岡山県にちなんだ「特別賞岡山賞」は、捕鯨など日本の伝統や食文化を守るために求められる水産業の構造改革について論じた松下政経塾の松田彩さん(三三三)が輝いた。

土光杯、岡山賞以外の入賞者は以下の通り。(敬称略)

【フジテレビ杯】湯村将貴(三〇) 〓 会社員 【ニッポン放送杯】小西沙紀(二八) 〓 会社員 【産経新聞社杯】三浦太地(二三) 〓 和大学

皆様、お疲れさまでした。「国難を乗り越えるために」という私どもの設定したテーマに真剣に向き合い、みずからの主題をこのテーマの中に巧みに組み込んで下さいました。また、審査員のコメントにも誠意をもって答えてくれました。諸君の努力により今年のこの大会も成功裡に終えることができ、心から深く感謝しています。

す。来年、再来年とつづくこの大会を一段と充実させるためのポイントも私どもはいくつもつかむことができました。

コロナ禍にあつて今年の土光杯をどうするか、関係者の心配には尽きるものがあります。しかし、こうやって全日程を終えてみますと、「やつぱり開催してよかったなあ」と心から思わされております。この困難な状況の中でこれだけの実績が得られたので

多岐にわたる諸君のスピーチのそれぞれにコメントする余裕はありません。今日、真摯なスピーチを聞いて、私どもの社会が努めていかなければならないことは何なのか、課題を、以下の三点に浮かび上がらせたいと思います。

一番目は公と私についてです。現代の日本では公に生きようという人々の観念が薄れていると多くの諸君が感じているように思われます。私も同感です。ある国際比較調査の結果を過日、ウェブでみたのですが、この調査により

ますと、先進国の中で現状への不満が最も多く鬱積しているのが日本人だということです。

もしそうだとしますと、日本人の不満鬱積の原因は、公に生きる意義を若者に伝えようとしない、そういう日本の教育の在り方にあるのではないのでしょうか。そのことが、若者に自分の小さな世界に住まうことを善しとする消極的傾向を定着させてしまったのではないか、と思うのであります。

私的利益というものは、これをいくら追求しても、その結果として残るのは小さな自己満足だけです。私的利益の追求だけでは、自分以外の何者かのために生き、共同体や社会に貢献することによって得られる、心の底から湧き出るような幸せは手にできません。経験してみればすぐにわかることで

すが、そうした思いと行動が私どもをなぜか名状しがたい誇りと幸福に導いてくれるのです。人間とはそういう存在として創られている、そのようにさえ私には思われるのです。

二番目です。何人かの諸君、例えば東京大学の松下天風君のスピーチによく表れておりましたが、コロナ禍の中で人々が共に生きる機会を喪失させられ、その経験から共に生きる、つまり「共生」の重要性に目覚めさせられた人々は少なくないと思わされます。

個々の人間が個々に生き、共同体や社会とともに生きて在るといふ実感、つまり「共生感」が手ひどいほどに薄れていきます。人間がそれぞれ私的利益のみを追求し、共同体や社会の中に住まっているという感覚を失ってしまえば、残

るのは自分という個のみです。他の誰をもあてにせず、信用もせず、愛することもなく生きるとは実に不幸といわざるを得ません。

人間が個として生きることが不可能です。仮に可能であっても、これが幸せにつながることはまずありません。もともと人間は個としてではなく、人間相互の絆の中に生きるよう運命づけられ、そうしてこの世に存在しているのです。問題はどうかやってこの「共生意識」を取り戻すことができるかです。さらに一緒に考えてみたいテーマですね。

最後の三番目です。皆さんは家庭、学校、職場、海外、地域社会、その他いろんな場でさまざまに経験を積んでこられましたよね。しかしそれらの経験も、これを言語化しないと、つまり文章化

したりスピーチにしたりしませんと、それらはいつの間にやら人生のささやかな経験としてほとんどが忘れ去られていきます。

経験は、これを言語化することによって初めて「経験知」となります。経験は、言語化によって確かな経験知のブロックとなりま

す。別の経験をしてこれを言語化しますと、もう一つの経験知のブロックができあがっていきます。いくつもの経験知のブロックを積みあげていきますと、簡単には崩れない経験知の大きな塊となります。この塊の大きさこそが人間として成長したことの何よりの証なのだとは私と考えています。土光杯などの機会を通じて作文やスピーチの力をさらに磨きあげていくて欲しいものです。以上です。ご清聴、ありがとうございます。